



砂利浜特有のガラゴロした音が遠くから聞こえてくる。

静岡県、沼津市。原海岸。

いつか来てみたいと、佐野碧を捜しにゆく車中から見えた景色に加夏子が言った場所に二人は立っていた。また無断外出であった。

狗が落ち着いてすぐ、加夏子は彼を誘い病院から抜け出したのだった。

二人を心配する人々への裏切りにも等しい暴挙だった。

それでも、やった。

時間がなかった。

「ここ、いいね。潮の香りも濃いし」

杖を手に佇む狗の肩を傍らで支えながら、加夏子は囁くように言葉を発した。

「不思議な音だね、あの音。カラコロガラゴロ、石の鈴みたいだ…」

「いってみる？ 歩きづらいけど」

「うん」

防波堤から踏み出すと、初めは固い土のようだった浜が次第に拳大の砂利を敷き詰めた傾斜となって海へと落ち込んでいった。

一歩進むたび右へよろけ左に傾きながら、二人はようやく波打ち際まで辿り着いた。

冬の海。風が冷たい。

「海、見たかったな。一度でいいから」

「ワタシ見てるよ。ずっと、ずう〜っと遠くまで見える。あれ伊豆半島かな…ね、何か見えてこない？」

「そんなに都合良く見えないって前にもいったじゃないか」

「そっか、ザンネン」

支える手を離さず、加夏子は足下に寄せてきた小さな波に目をやった。

砂利というには大きな石たちが、波に巻かれ無数のダンスを踊っている。

「ちょっとさむいね」

ぽそっと狗が呟いた。

「ウン」

「背中はあるかい、カナがいるから」

「ワタシさむいよ」

「もうチョットかぶさってくれたら、二人ともあったかいよ」

加夏子が後ろから狗を包み込んだ。

胸元で合わさった腕に、狗がそっと片手を重ねた。

「ごめん」

「どうしてあやまるの」

「もっと一緒にいてあげたかった。いたかった。普通の人が妬ましい。こんなこと今まで思ったこともなかったのに。やな奴になっちゃったな、僕」

「ジュンはいいいとすぎる。もっとワガママになっていい、ひとに迷惑かけたっていい」

「今はワガママだよ。勝手に飛び出しちゃったし」

「そうね」

髪をかきあげた加夏子の目に、小さな何かがとまった。

「あれって…」

打ち上げられた木の板。

位牌だった。

「どうしたの、カナ？」

「やだ、こんな所にあるなんて」

不安気に尋ねる殉には答えず、加夏子は波打ち際へ進みそれを拾った。
滲んだ墨の文字を読みとってみる。

「2008年7月30日って、去年の夏か」

「ねえ、なにかあったのかい」

「やなものとつけちゃった。でもなんで」

「魚の死骸か何かかい」

「ちがうの。お位牌」

「海岸に、位牌？」

殉が眉をしかめた。

「ごめん、変なもの拾っちゃって」

「謝ることないよ」

「だって縁起でもないじゃん、殉がこんな時に」

そこまで言って加夏子は口を噤んだ。

「そんなに気をつかわないで。今すぐどうにかなっちゃう訳じゃないんだからさ」

「でも…でもさ」

「ストップ！」

加夏子に向けて指を一本、殉が立ててみせた。

「よそう、もう」

転ばぬよう、ゆっくりゆっくりと加夏子の方へと歩み寄ると、すう〜と殉が手を伸ばした。

「かして」

「あ、うん」

渡された位牌をそっと撫でてみる。

「このひと、どんな想いだったんだろう。溺れたのかな。事故なのかな。もっと生きていたかっただろうな、きっと」

「…」

置いてきな、そこに

突然かけられた、聞き覚えのあるダミ声。

殉は加夏子の気配が強まるのを感じた。

声の主が誰かはすぐに判った。

「来たんですね、銀さん」

「ったく、二人とも病院抜け出すのが癖になりやがって」

ざっざと大股で歩いてくると、銀さんはごつい拳を一発ずつ二人の頭に落っことした。

「イタイッ！」

「キャッ！」

「馬鹿野郎！ オトナに心配かけんじゃねえ！！ って、まあよ、じつは知ってて見逃したんだがな」

「いったいなあ…銀さん人が悪いですよ」

「そうよお、目から星でたよ、ホントに」

頭をさすりながら涙目で抗議する二人に軽く笑いかけながら、銀さんは殉の手から位牌を取った。

「お前も馬鹿野郎、だな」

ふうと溜息を漏らして位牌を足下に置くと、低い声でそれに語りかけた。

加夏子が意外そうな顔でそれを見ていた。

「銀さん、知り合いなの？ その位牌の人と」

「まさか」

しゃがみ込んで、位牌の周りに石をつみながら銀さんが呟いた。

「地元の奴ならここじゃ泳がない。こいつはヨソモンだろうよ。俺のダチもよ、ここで死んだんだ」

銀さんが言った。

「友だちって… 銀さんの実家、確か山梨のほうじゃなかったっけ？」

不審気な声で加夏子が聞いた。

「甲府だ。今じゃ誰もいねえが。若い頃、この辺りで暮らしてた。大学行ってたんだぜ、これでも」
「銀さんが大学生、か。チョット想像出来ないな」

殉の声にも少しだけ困惑の色が混じっていた。

「山の方を見てみな、建物が見えるだろう。東海大学の校舎だ。俺はあそこに通ってた」

当時は海洋学部っていう海の専門校だったんだぜと、遠くを眺めながら銀さんが呟いた。

「…いい場所だった。仲間にも恵まれた。みんな親元離れて一人暮らしだった。貧乏学生揃いだったが、毎日バカやって楽しかったよ。元気だけは売る程あったからな」

「この辺りは良く知ってるんですね」

確かめるように殉が聞いた。

「ああ。ここで泳いだこともある。ほんの少しだけだよ」

位牌に石を積み終わった銀さんは、立ち上がると軽く両手をはたいた。

「潜ると、どこまでいっても石だ。それが崖みてえに深い底へと落ち込んで。先も見えない真っ暗な海の底へ、よ」
「なんかコワイな、それ」

加夏子が素直に感想を言った。

「怖い海さ。潮の流れは早い、寄せる波はどんぶかの浜に当たって引き波になる。少しでも浜にかぶってりゃ、海に入ったモンは必ずさらわれて底まで引きずり込まれちゃう。それを知ってるから地元の奴は絶対に泳がない」

「でも銀さん、泳いじゃったんですよね」

「坊やくらいの頃は怖いモン知らずだったからな。先輩達から『あそこは人喰い海岸だ、絶対はいるな』と言われてれば言われるほど燃えたよ。うねりの穏やかな日、潮どまりの隙間を狙って泳いだ。自分は間抜けじゃないと信じてた。そして…やっちゃった」

話すのを止め、銀さんがポケットから煙草を取り出した。

うつむき加減に手で覆いながら火をつける。

煙はすぐ風に散った。

「アイツは泳がなかった。止めると怒鳴ったくらいだ。だが俺を見て油断したんだろうな。遊びで叩いたビーチボールが海んなか落ちた時、取りに入って…戻れなくなっちゃったんだ」

加夏子も殉も、何も聞かなかった。

何も言えなかった。

鈍色の雲が、今にも泣き出しそうだった。